

私の脳裏に焼き付く、 広島被爆体験！

大村 一夫

(広島、爆心地から1.6km、当時4歳8か月)

札幌市



東京大空襲を“体験” —

私は東京大空襲を“体験”し、さらに広島で“被爆を体験”し、それらを鮮明に記憶して時系列に語るができます。

私は5歳の時広島市で爆心地から1,600mの白島中町で被爆しながらも奇跡的に生き残りました。

私が広島で被爆するまでの、自身の生き立ちをお話し致します。私は千葉県庁に勤務の父のもと、千葉市で1940（昭和15）年11月に生まれました。母は私の誕生後に病を発症しました。ちょうど父が千葉県庁より軍務でマレーシアに赴いたこと、そして戦時中でもあったので、母は兄が医師として勤務する故郷北海道の伊達市の病院に入院しましたが、翌年5月に死亡します。ですから私には意識に残る母との出会いはありませんでした。父親は軍務で不在だったので、父の母親では留守宅の支えは無理と考え、教師として勤め始めたばかりの父の妹を松戸市に呼びよせました。つまり私は1歳上の姉と叔母と祖母（父の母親）の4人で、留守宅を松戸市に置いての生活を送っておりました。

私の記憶はこの頃より鮮明になります。松戸市は江戸川を挟んで東京と接しております。1945（昭和20）年に入ると、連日のようにB29爆撃機と護衛艦載機の空襲があり、灯火管制を余儀なくされる日々が続きました。爆風で割れたガラスの破片が飛び散るのを防ぐため、窓ガラスに半紙張りの手伝いもしました。連日の空襲に備え、町内会の女性のみでのバケツリレーによる消火訓練も行われておりました。敵の艦載機による機銃掃射を見ながら逃げ回り、銃撃の後艦載機がバラまいたビラを拾って家に持ち帰ると、それは降伏勧告をするビラでした。

そんな中、3月10日夜中より始まったB29爆撃機約300機による東京

大空襲の、対岸の空が真っ赤に染まる様子が脳裏に残っています。翌朝、我が家の庭一杯に熱風で舞い上がった焼けた印刷物が降ってきていました。東京の爆撃は焼夷弾攻撃で、10万人を超える焼死者を出していました。

広島へー

私の父親は5月にマレーシアから帰り広島軍令部に転属になったので、一家で広島市に転居しました。広島は“戦争など何処で？”といった雰囲気、瀬戸内海気候で気持ちよく、今まで住んでいた首都圏とは異なり、平和そのものでした。その間、父親が勤務で留守中、家族4人で電車に乗り、宮島、厳島神社詣でに行き、鹿に餌を与えたり、戦時中とは思えぬのどかさでした。

私が伝えたい8月6日は、広島での被爆体験だけでなく、被爆が自分の人生にどのような影響を与えたかということです。東京大空襲と異なり、広島・長崎の被害、惨状は？生き残りの人々に如何なる苦悩を与えたか？放射能による後遺症は？核の脅威とは何か？さらに大規模の展示館まで設置して世界の人々に訴える、この違いは何故だろうか、そうしたことについてお伝えします。

運命の8月6日

素晴らしい青空の朝、父親が出張のため朝食時間が遅くなった私は、原爆投下直前、家の付近で私達（姉と私）と近所の友達3人と、5人で地面に絵をかきながら夢中に遊んでおりました。朝食が出来上がったと叔母ちゃんが呼びに来ました。友達は遊びに熱中していた私達に、“まだ遊んでいるから早く食べて戻っておいで”と背中を押す声をかけてくれました。姉と私は友人3人をその場に残し、自宅に戻って食卓につきました。その間「空襲警報解除」の放送があり、叔母ちゃん、おばあちゃんが「良かったね！」と言葉を交わし合っていました。そして茶碗を手にして箸を入れたとき再び飛行機の爆音が聞こえてきました。叔母ちゃんが「日本の飛行機だよね！」と言った瞬間、大閃光と同時に激しい爆風で我が家はたちまち全壊してしまいました。畳に座り食事をしていた私は、姉と一緒に地べたの倒れた柱の隙間にいて助かりました。直ち

に二人で、いつも傍らに置いてあった防空頭巾を持ち倒壊した家の柱の隙間をくぐりながら、やっとのことで外に脱出しました。おばあちゃんと叔母ちゃんは、私達を捜すため立ち上がり、倒れてきた柱に頭を打ち、額は大きなコブと内出血で“お岩さん”のような形相になって外に出てきました。

外に出ると家並みは爆風で吹っ飛び全壊、町は消えていました。中心部から小走りに、又はビッコを引きながら、ボロをまとい血だらけの人々が次々と押し寄せてきます。怪我の酷い人、火傷で血が噴き出し顔がよく見えない程の人も、川の付近の避難場所を目指し走って来ます、その集団に私たち家族も加わり走りました。外で遊んでいた友達の姿は見つかりませんでした。避難場所に向かう通路近くの練兵場では、朝の体操中、上半身裸、パンツ一枚で被爆したために全身火傷の兵士がたくさんいました。熱さに耐えかね、“水をくれ”と大声で叫び、求めても、兵舎内で被爆した制服の兵士が、助けがくるぞ！がまんせい！水を飲んだら死ぬぞ！の怒号。叱咤激励の声も聞けず、次々と川に飛び込み、流されていきました。私たちは、人々が川に沈む様子を見ながら、迫る火の手を避け、次の避難場所を求め市内を駆け巡りました。夕刻、子どもの目線で高い石碑のある公園に、数多くの人々と到着しました。農家の方々から、“片口研ぎざる”に山盛りの胡麻塩おにぎりを頂きました。朝から何も食べていなかったのも、そのごま塩おにぎりの味は生涯忘れる事の出来ない美味しさでした。

被爆後の様子

暗くなる頃、農家の方々の指示で被災者が振り分けられた納屋を宿泊場所に、グッスリと眠りました。翌朝、朝食に大きな鍋一杯の炊き出しをご馳走になりました。怪我の酷い人は手配の大八車に乗せられ治療所に運ばれました。

父親は翌日の深夜に出張先の山口県萩市を出て、広島壊滅！の報を聞き、多分一家全滅を頭に浮かべながら、避難経路を辿りながら訪ね歩いて当所にとどり着き、家族全員と再会することが出来ました。

次の日、お世話になった農家の方にお礼を言い、全焼した自宅焼け跡

に向かいました。跡形もなく焼け跡の瓦礫と化した我が家の姿、形を留めたのはコンクリート製の台所流し台、翌日用のツバ付き炊飯釜のみ。ただ庭に焦げた実がなった柿の木が残り、花畑を転用した畑は、表面を火が舐めて走り墨のようにいろんなものを焼き尽くしましたが、残ったカボチャは食べ頃に煮えていて、瀬戸物の欠片で割って家族全員、放射能など知る由も無く美味しく食べました。

防空壕での生活が始まりました。焼け野原には、昼は燻り、夜は投影法でローソクが灯った様に並ぶ当時の木製電柱群が残り、燃えながら日々わずかずつ低くなり、中ほどの高さで火は消えました。強く印象に残る不思議な光景でした。町内会の方々が、避難の途中力尽きて亡くなった方を昼間に交差点に集め、夜になると油を掛けて焼却、その死臭が庭の防空壕まで届き、風の強い日は特にキツかったのを覚えています。原爆ドーム近くの仮設の役所に叔母さんと罹災者証明を取りに行きましたが、まだ温もりが残る瓦礫の市街地に、多くの人が写真を片手に帰らぬ身内を捜していました。何度も尋ねられながら歩きました。原爆投下の時、市街地はラッシュアワー時のため、焼け焦げになった骨組の電車が数多く停車し、車両内には黒焦げの乗客の遺体がまだ多く放置されたままでした。

数日後、町内会より重大な放送があるとの連絡を受け、集まったところ、天皇陛下の放送です。聞いていた大人が泣いている、玉音放送でした。日本が負けた、でも私は意味がよくわかりませんでした。

生き残った私の人生に、核がどのような影響を与えたか

9月には父の勤務先の役所が借り上げた近郊の五日市の寮に移り、何世帯かと暮らしました。様々な被害話、家が倒壊し誰も周囲におらず火が迫るのでご主人を置いて逃げざるをえなかった話、怪我はしていないが、毎日髪が多く抜ける話をするおばさん達。そのおばさん達が数日後には坊主頭になり、更に数日後には何人か死亡しました。私も脱水症状の下痢をし、死ぬ恐怖の中で怯えていました。11月に父親は仙台市の宮城県庁に転勤、私達家族も一緒に行きました。その頃には脱水症状も治まりました。翌年4月には姉が小学校に入学しました。

1947（昭和22）年、父の転勤で今度は富山市に移り、私もそこで小学校に入学しました。この頃には体調も良くなり、広島の出来事も遠い昔の事の様に思えてきました。しかし、翌年札幌市に移り住みましたが、その頃から原因不明の高熱、微熱を繰り返す病を発症し、通学不能となり命を落とすので無いかとさえ思いました。父の決断で小学校を1年半休学し、留年して2度目の3年生の途中から復学し、1954（昭和29）年3月無事に卒業することができました。

その3月にビキニ環礁の水爆実験があり、近くに停泊していた第五福竜丸の甲板で休憩中の久保山愛吉さんが水爆の閃光を浴び被曝しました。この出来事のあった4月に私は中学に進学しましたが、久保山さんが亡くなられ、放射能の影響による後遺症、白血病、がんの発症例等々が彼方此方で報道されることが多くなり、広島の被爆者の生き残りの私に対しても重くのしかかり、私の前途は不安だらけの暗雲に包まれました。放射能後遺症の話題が私に向けられ、イジメを受けたわけではありませんが、いたわり、心配の言葉がかけられるのすら邪魔になり、周囲の同情の言葉から逃げ、その中学校から他校に移り、それ以後広島での被爆体験を封印しました。

努力は報われるという当たり前の言葉の一方、でも“お前には時間が無い”この葛藤から如何に生きるか？私は未来に夢も持てずに、不安・怯え・やけっぱち・投げやりになりました。一方で、自分は今日を大切に生きたい、自殺するなんて絶対にダメだと、自分の心の中で放射能の不安との闘いの毎日を送っていました。高校に進学しましたが、入学後の社会科の授業で「将来何をを目指す」という教師の質問に、それぞれ親の仕事を継ぐ、医師を目指す、公務員などと答えましたが、質問が私の番にきたとき、私は“ケセラセラ”と答えると、その教師は面食らい意味不明の言葉に戸惑っていました。映画好きなクラスメートが助け舟を出し、封切りされたばかりのヒチコック監督の映画の主題歌で、ケセラセラはドリス・デイが歌い、日本では雪村いづみが歌っている、歌詞のケセラセラは、和訳すると“先のことなど解らない、成るようになる”という意味だと話しました。この説明にクラス全員が大爆笑して終わりましたが、私の真意は誰も解らなかつたと思います。それほど私は投げや

りでした。皆は進学を目指して真剣の中、私は目標感が何も無かったです。

ある出来事から、早く世に出たいと考えるようになりました。3学年に進級後、6月にたまたま夕刊紙に掲載された文部省大学資格検定試験の受付記事を読みました。15科目修得が条件でしたが、病気のため1学年遅れた自分にとっては、2学年修了ならば6科目修得で良しとのこと、“これだ”と思い退学を決意し、この資格にチャレンジしました。幸い受験合格しましたが、高卒年齢に達していると自分で思い込み、何社にも応募の履歴書を送りましたが、意に反し応募した全社から、高卒資格未達で応募履歴書が全数返送されてきました。やはりダメかと諦めかけた頃に、創立間もない会社の直接面接の募集広告が目にとまり、これが最後と思って訪問したところ、直接創業者の面接を受け、採用になったのです！この数十人の会社が、後に子会社を含めると1,000人規模の会社となり、50年にも及ぶ長い勤めで、一生の仕事となるとは当初は思いもしませんでした。

幸いに勤めることのできた会社でも難問が降りかかりました。勤務先の会社で毎年受ける定期健康診断、この検診時の血圧に対する医師の一言で、私は夜も眠れぬ恐怖心に陥りました。その後は定期健診は受けず逃げ回り、風邪引きなどは売薬で済ませ、医院の看板、医師の白衣から意図的に逃げ、自身の白血病発症の不安を抱く日々を送っていたのです。

語りついでほしい！

40歳を越えた頃、偶然に医師となった同期生と出会い、“俺が診てやる”の一言で診てもらったところ“異常なし”、それ以後は気を許した医師ならばと診断を受けられるようになりました。

その後、一旦は断りましたが、管内2つの中学に在籍した君は、人一倍多くの級友の消息を知っている！是非とも参加をと促され、今度は高校同窓会の当番期の仕事を手伝うことになりました。高校同窓会は、卒業していなくても在籍していれば加入できるというのです。彼からぜひとも加入して欲しいと頼まれ、加入を決心して手伝うことになりました。まずは同期550人の40歳を越えてからの名簿づくりに着手しました。そ

こでわかったことは、42歳の550名の同期のうち、なんと24名が病気、事故、自死などで亡くなっていたのです。人は様々な要因で命を失う、だが私は幸いにもまだ生き延びている、と思い、このことは私のその後の生き方に大きな影響を与えることになりました。

広島で“家に戻るよう”促がしてくれた3人の友達は、今も私の耳に残る声を残したまま亡くなりました。さらには多くの無念の気持を持ったまま亡くなった人達、助かって私と同じ苦しみから脱出できない人達がたくさんいます。私は、彼らのためにも、また自分たちと同じ思いを二度とさせないためにも、核の恐ろしさを伝える語り部活動を行うと同時に、これからも語り継がれる語りを目指して全力を残りの人生に使う決心をしました。